主イエスのパン種　Ⅱ

マルコによる福音書８章１４-２１節

森島　牧人　牧師

前回、ファリサイ派の人々がメシアとしての＜しるし＞を見せるよう主イエスに迫るという場面を学びましたが、現在、私たちが通常の生活をする中で＜しるし・保証＞を必要とする場面はたくさんあって、それなしでは生活出来ないほどになっています。しかし、私たちキリスト者が受け入れた福音、すなわちキリストによる罪の赦しや、どんな時もキリストが私たちと共にいてくださる（インマヌエルの神）等々は、目で見たり、手で触れたりしてそれを確認出来るというものではありません。

ところが、ファリサイ派の人々は、どうしてもそれをはっきりと分かる形で示して欲しいと、主イエスに迫ったのでした。しるしを求めて議論をしかける彼らに、主イエスは「どうして今の時代の者たちはしるしを欲しがるのだろう。はっきり言っておく。今の時代の者たちには、決してしるしは与えられない。」(マルコ８：１２）と言われたと聖書にあります。この時、主イエスが深く嘆いて言われたこの言葉の原文は、最も強い否定の言葉で、文語訳聖書では「・・・まことに汝らに告ぐ、徴は今の代に断えて與えられじ」となっています。

さて、それではファリサイ派の人々の言う「主イエスがメシアであるというしるし」は、全く与えられていなかったのでしょうか。マルコは、主イエスの数々の御業がメシアとしてのしるしであるとは言わず、淡々と語って行くのですが、嵐を鎮め、悪霊を追い出し、死者を生き返らせる等々、主イエスが神の遣わされた方であることを示すものは、すでに数多く人々の前にあったのです。ファリサイ派の人々はそれらをたくさん見て来たにもかかわらず満足せず、悪霊を追い出したのは悪霊の頭によるものだなどと言い、さらなるしるしをと、主イエスに迫ったのでした。

この時、主の周りは、ファリサイ派を始めとしてこのような考えの人々でいっぱいでした。もし彼らが神の言葉を理解していたなら、彼らは主イエスがモーセを超える存在であること、その力ある御業が神の力によるものであることなどを喜んで受け入れ、罪の贖いに与ることが出来たのでした。それでは何故、人々は愚かなことをしてしまったのでしょうか。これは私たち人間の中にある弱さによるものです。眼前にあるしるしをしるしとして受け入れることが出来ず、いつまでもしるしを追い続ける。そして、その結果として永久に真理に出会うことは出来ないのです。

聖書には、主イエスがパンを一つしか持たずに舟に乗ったことを心配する弟子たちに「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種によく気をつけなさい。」（同８：１５）と戒められたことが記されています。人間の中に必ずある「ファリサイ派の人々のパン種とヘロデのパン種」。それは本人の気づかないうちに彼を「神・主イエスへの反逆者」とし、彼の中にある罪をさらに大きなものにするのです。滅びに至る道を歩むことのないよう、私たちはこの主イエスの戒めを我がものとして注意しなければなりません。

天からのパン種を持って地上に来られた主イエス。一人一人がそのパン種をいただき、福音のしるしである＜聖餐・バプテスマ式＞を正しく守って、喜びの中を主と共に歩ませていただきたいと思います。

（要約奉仕　羽入田悦子）